

素描画の魅力

旺盛な制作意欲から、常に傍らにスケッチブックを置き、気に入った対象があればすぐに素描に取り掛かっていた三岸節子。「色彩の画家」の根底には、デッサンにひたむきに取り組む姿勢がありました。画家の腕を鍛え、また印象を描き留める手段として、画業を通して常に節子はデッサンと向き合っています。一本の線に魂を込めた素描画や、色彩豊かなパステル画など、その魅力をご紹介します。

デッサンについて

「デッサンは大切でせうか」

「ええ毎日鉛筆と紙をはなさないやうに、いつも手を動かしてゐる位にするものです」(注1)

これは、絵画の初学者と節子とのやり取りです。16歳で上京して官展の重鎮・岡田三郎助(1869-1939)の画塾に通い、翌年から女子美術学校(現・女子美術大学)に学んだ節子は、その画業の始まりにおいて、アカデミックな技術の鍛錬を積んでいます。自身の経験から、節子は先の質問の背景について次のように見抜いています。

学校や研究所で定められた期間、石膏デッサンや人体デッサンを課せられる退屈を指してこんな質問となるのでせう。

何等感興も湧かないし、又意欲もおきないのに、習慣的に味気なさを繰り返してゐたことは、私じしんよく覚えてゐることです。(注2)

それでもデッサンの大切さを説き、「一本の線でも強靱な、切つても切れない線を描けるまでになりたいものです。」(注3)と、この頃50代に入っていた節子は語っています。自由奔放に、思いのまま筆を動かしたかにみえる節子の作品はしかし、若き日に鍛えられ、画家として名を成してなお研鑽に努めたデッサン力によって下支えされています。



1950年代前半©MIGISHI

風景のスケッチ

49歳のときの初渡欧を経て、1968(昭和43)年に63歳で家族とのフランス移住を果たして以降、節子は風景画家として本格的に開花していきます。作品にしたい場所は、家族とともに出かけるスケッチ旅行で探すのが常であり、車の運転及びコンダクターは長男で画家の黄太郎が担っていました。旅先でスケッチに励む母の姿を、黄太郎はこう述懐しています。

母は常にクレパスを入れた小箱とスケッチブックを持って歩く。気に入った構図が見つければ、すぐにデッサンを始める。ヴェネチアには10回ぐらい行っただろうか、いつも10日間ほど滞在しては何枚も色つきのデッサンをしていた。それを持って帰り油絵にする。

しかしそれはデッサンとは別の構図となった。最初のデッサンはまったく崩されている。

母の死後、この膨大なデッサンを整理していて改めて気がつき、不思議な気がした。どうして現場でデッサンをするのか尋ねたことがある。その場で覚えておかないと忘れちゃう、と答えた記憶がある。(注4)

この黄太郎の言にあるように、デッサンが習作でありタブローが本絵であるという主従関係は節子の場合、必ずしも絶対的ではありませんでした。残された数々のデッサンからは、デッサンをもとに風景が再構築されてタブローとなったり、ときにデッサンの上から水彩や油彩を重ねる・パステルをテレピン油で定着させるなどして絵画として成立させることもあったことが窺えます。画業を経るごとに節子のデッサンは、風景の瞬時の印象や感動を描き留める手段となっていました。



1980年代前半 スペインにて ©MIGISHI

また、黄太郎の言う「色つきのデッサン」は、節子が好んだ画材、クレパス(注5)を用いて制作されました。クレパスとは一般名称としては「オイルパステル」と呼ばれ、学童用にも使用される画材ですが、節子は「いくらか厚く塗ることによって面白くなるという、クレパスは特殊な性質を持っております。」(注6)とその描き心地を気に入り、航空便で送ってもらって間に合わせるほど愛用していました。色彩画家らしい節子の色とりどりのスケッチは、意外にも身近な画材から生み出されていたのです。

一宮市三岸節子記念美術館 学芸員 野田 路子

(注1)(注2)(注3)三岸節子「花より花らしく」求龍堂、1977年、26-27頁

(注4)三岸黄太郎「母、三岸節子の一生」『生誕100年記念 三岸節子展 永遠の花を求めて』2005年

(注5)「クレパス」は株式会社サクラクレパスの登録商標です。

(注6)「増刊アトリエ」1956年5月号